

## 4年図画工作科・大森果歩実践「Future FUZOKU School！」 —子供の一人一人を見取って支え、成長させる「同行者の姿勢」について—

### 1. 教員の図画工作科への指導姿勢

小学校、特に高学年では教科担任制についての議論が盛んになってきている。図画工作科の教科担任制については、一部の都道府県や学校に留まっている。基本的に学級担任である小学校教員が全教科・領域を、図画工作科も含めて担当、指導するという状況は、今後もしばらくは継続すると考えられる。

大森教諭は、学生時代の専攻が社会科教育だった。小学校教員であれば担任学級の図画工作科を指導するのは当然であるが、本校は先導的教育の構築が責務の一つである。この本校の公開研究協議会で、図画工作科の授業を公開することは大森教諭にとって、けっして安易な気持ちでは取り組めないことだったと推察する。実に意欲的な指導姿勢だった。

図画工作科への指導意欲も旺盛な大森教諭は、題材「Future FUZOKU School！」に様々な指導の手立てを準備して取り組んだ。この題材で大森教諭は、「学びの地図」を子供とともに作り、見つめていくという「同行者の姿勢」で、子供たちを支えていたと筆者は考えている。

筆者は図画工作科の「同行者の姿勢」について、材料・用具の扱い方や表し方の指導を基本的なところに留め専門的なところまで踏み込まない、子供自身が表し方を工夫するように導く、表現の方向性は飽くまで大まかなところまでしか提示しない、発想・構想などには間接的にのみ関与する、などと考えている。子供自身が自ら考え、工夫し、自分なりの表し方で進んでいくように導くもので、筆者は造形教育における教員の姿の理想と考えている。

この「同行者の姿勢」の具体化について大森教諭は、本校紀要「授業実践記録」で丁寧に記述している。例えば、『『未来の学校をみんなでどう表す?』という新たな問いを先回りせず、子供たちの表現過程を見取って発したことなどである。是非、共感的に読み取ってほしい。

### 2. 公開授業における「同行者の姿勢」の成果

「授業実践記録」に記述されている「A児」に、筆者も強く関心をもった。図画工作科という教科の枠にとらわれない心身全体による試行錯誤を展開していた。図画工作科だけでなく、あらゆる学習活動から身に付けた知識や技能を発揮していたことも、筆者は確認している。

大森教諭の「自由な学習形態を保障」という姿勢は、筆と水彩絵の具による表し方で進んでいた本題材で、A児が躊躇なく折り紙表現も選択することを支えていた。この躊躇なく、表し方を試行錯誤、選択するという行為は、大森教諭が本題材だけでなく、これまでの図画工作科の授業で「同行者の姿勢」を堅持してきた成果の一つと筆者は考えている。

大森教諭は「授業実践記録」で、B児のグループが「画用紙を縦や横につなぎ足して」という表し方を選択して、創造的な「レイアウト」に到達していたこと、さらには「表現世界がどんどん発展」していたことも報告している。子供たちは学習が進むにつれ、「表現」を「追究」する姿を一層明確に見せていたのである。

画用紙という材料で子供たちを絵に取り組みせれば、多くの教員は画用紙の長四角の世界に、子供の表現が閉じてしまうという事象に突き当たることがある。克服は難しいことである。この困難さを大森教諭は、「自由な学習形態を保障」という姿勢を最後まで粘り強く堅持することで、克服していたと考えられる。

図画工作科では、「つくり、つくりかえ、つくる」(『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 図画工作編』8・27・40・63・75・86・106頁)を目指す姿の一つとしている。一朝一夕に形成、身に付けさせることは、簡単なことではない。これを大森教諭は「同行者の姿勢」の堅持によって成し遂げつつあるのではないか。大森教諭は今後の課題として、「参考となる作品や映像資料などを鑑賞」することで、「色の組み合わせ方や構図の変化から感じる様々な表し方」を学ぶように導き、「新たな表現方法」を子供自身が習得することを挙げている。筆者も同じ視点に立っている。教育現場は多忙であるが、是非乗り越えてほしいと願っている。

### 子供達の「豊かさ」にふれて

今回、初めて研究協力者として附属小学校の研究会に参加したが、「とても勉強になった。」「子供達から学ぶ事が多かった。」というのが率直な感想である。授業を参観する中で子供達に「表現」に対する刺激を受けた。子供達の表現する事への喜び、そして表現する事への葛藤、様々な心の動きとそれに伴う表現の在り方と変化を見取る事ができた。指導者側に位置する筆者の方が、学び手である子供達にあらためて「表現するとは何か」を教わったような心持がした。

ここでは、その子供達の表現についてふれながら私見を述べたい。授業の具体的な概要は、先生方の実践記録に具体的に記されており、そちらをご一読頂きたい。

### 豊かな子供達の表現（一例）

筆者は、参観しながら興味深い表現をしている子達に話しかけてみた。ある子は、「ここに空を描こうと思う。ただ、ここ欲しいのは空のイメージ。」と言い、空を「形」にしていた。雲にではなく、壮大に広がる空間に「形」を与えるというその子の発想に驚き、とても感心した。その「形」は、画用紙の中で、この子のイメージに基づき自信を持って「構成」がなされているのである。その子は、空を「色（青色など）」で表現するのではなく、「形」で表現するという豊かな発想をもとに、とても楽しそうに表現していた。多くの大人は、「空」をイメージする時、青く広がる空間に「雲の形」があると考えてしまうのではないだろうか。それは、私達が大人になってしまい、子供の見ている世界を見る事はできないという事である。また、ある子は、画面の真ん中に比較的小さなとある「形」を描き、そこをずっと見つめていた。その子に話かけると一言「考えている。」と言った。筆者には、その姿が画面と対話し、葛藤しているように見てとれた。その後も気になって遠くから様子を見ていたが、途中で恐る恐る小さな「形」を慎重に描き加えていた。画面を見ただけではあまり進んでいないかのように見えたであろう。しかし、その子は、この時間に画面との対話を繰り返し、深く思考する事を通して素晴らしい経験をしたのだと思う。

一見すると、プリミティブ（未発達、原始的）だと捉えられる発想や表現は、多くの学びをもたらしてくれる。今回、筆者が見取った子供達の表現（上記だけではなく、全体像として）の背景には、「なぜ、雪舟や雪村、ピカソやマティス等が高い評価がなされるのか。」という事が潜んでいる。様々な場で、大人が雪舟やピカソの絵を見て、「これなら自分でも描ける絵だ。」と言っている声を聞いたりするが、それはできないのであり、だからこそ、彼らには高い評価がなされているのである。

ただ、この子供達の多くが、成長すると共にこの頃の表現ができなくなる。それが、成長する、大人になる、という事である。成長する事は、得るものばかりではなく、それと同時に、失うものもある。しかし、その子供達の豊かな「表現」や「発想」をしっかりと評価してあげる事で、「少しでも先に繋げる手助けができないのだろうか。」「今後の何かのきっかけになる可能性をのこす事はできないだろうか。」等と考えを巡らせた。また、授業では、既に大人に近付いている表現も見とれた。どれが良いという事ではなく、その子一人一人に応じた指導や声かけが大切なのだと思う。ただ、これがとても難しいのである。どのようにすればよりその子の為になるのか。図画工作の授業としてどのようにあるべきか。今回、子供達の豊かさにふれた経験から、筆者自身の今後の課題が見えたように思われる。